
お前に世界が救えるか？

中華妖精

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前に世界が救えるか？

【Nコード】

N7687V

【作者名】

中華妖精

【あらすじ】

異世界に召喚されて可愛い巫女さんをお願いされたから仕方なく世界を救おうと思ったんだけどちくわしか持ってねえ

（前書き）

思いつきで書いた。後悔はしていないから公開する。
だがわけわからんね。

朝起きて、学校に行き、帰ってきたら風呂に入り、飯食って寝る。
毎日同じことの繰り返しだ。

そりゃ、友人と馬鹿やるのは楽しいし、テレビだって面白いときもあるし、家族との会話だって。

課題なんかも、極稀にだけど、楽しい時だってある。

……だけれど、やっぱり、刺激が足りない。

本は良い。ファンタジーは、凄く好きだ。

最近、インターネットで、そういう色んな話を読み漁ったりしている。

その上で、よく思う。

僕にも、こんな出来事が起こったらなあ、と。

物語の主人公を見ていて、いつも夢想していた。

僕なら、そこでこうする。

僕なら、そこでこう言う。

僕なら、僕なら、僕なら。

でも結局、考えるだけ。

現実には何も起こらないし、起こすこともできない。

トラックに撥ねられて別の世界に転生なんて有り得ないし、ピン

ク髪の美少女に召喚されたりだとか、そんなこともない。

だから、躍起になって絵にしたり、小説にしたりしてみた。だけど、僕にはそういう創作の才能がいらしく、ちっとも上達なんかしなかった。

僕は、他とは違う存在なんかじゃない。特別な存在なんかじゃない。

…いや、他とは違うし、親とかにとっては僕は特別な存在なのかもしれないけれど、そういうことを言ってるんじゃない。

主人公になりたかった。

強くて、格好良くて、女の子にモテて。

そういう奴になりたかった。

そう思っているうちに、現実の僕はきとうな生を歩んで、きとうな自分を作り出していた。

テストをやっても、いい点は取れない。取ってないだけ、やればできるんだよ、なんて嘯いてみても、その時結果に残していなければ、ただの負け犬の遠吠えだ。

行事をサボっても、学校を休んでも、自分を正当化して。

あまつさえ、来世には、もっと頑張ってるさなんて、考えていた。りした。

そんな人間が主人公になれる訳がない。

世界はそんなに甘くない。

望んだことがストレートに叶えられるなんてことはない。

そう理解した時から、僕は、現実から少しだけ目を逸らして生きてきた。

どうせ上手くいかない。

願ったって叶わない。

努力なんて時間の無駄。

だから、どんなに憧れても願っても主人公になんてなれやしないし、異世界に召喚だとか、転生だとか、迷い込むとか、そういうのもない。

神様が間違っつて僕を殺す、なんてこともない。お詫びに別の世界へ。強い能力をつけて。美男子にして。

ないない。

神様がそんなお人好しな訳がない。

だから、上手くいかないんだって。

望んだって、憧れたって、仕方がないんだって。

現実を見ないと。しっかり歩いていかないと。

そう思いつつも僕はそういう世界に憧れていた。

僕なら、そういう世界に行けば、たちまち英雄になれる。

別に武術の心得なんかないけど、異世界に行くのなら、そういうのがついてくるだろ。

僕の血筋だとか、天性の才能が、とかが開花して、劇的に強くなれるだろ。

だから、悪い奴なんてあつというまにやつつけられる。

それで、モテモテになる。
大団円にできる。

だが、どうだろう。

どうだろう、この現状は。

目の前に跪くのは、赤と白からなる衣服を身に纏う、所謂巫女さん。
ん。

長く艶のある黒髪が垂れて、その人の顔を隠していた。
手に持っているのは、お払い棒、というやつだろうか。

祈るように体を折る巫女さんを前にして、僕は、惚けていた。

天上には厚い黒雲が流れ、空の青を全て塗り潰していた。

赤い光がその中に混じっていて、巫女さんの背後、遠い街並みや、
地平線の先から火の手が上がっていた。

固まる体を無理矢理に動かして周りを見回せば、背後には大きな
椅子…まるで、王座のようなものがあり、そこには、髭を蓄えた、
やたら豪華そうな装飾を身に付けたオッサンが眠っている。

その周りには瓦礫が散乱していて、巫女さんの背後に外の風景が
広がっているのは、そこにあるはずの壁が崩れてしまっているから
だと推測できた。

ドオ、と重い音が響いて、床が揺れた。思わず二歩三歩後ろによ
るめいてしまう。

巫女さんの背後の壊れた壁の外、下から勢い良く火の粉が舞い上
がってきて、部屋に侵入してきた。

生暖かい風も一緒に入ってきて、僕の頬を撫ぜていく。

巫女さんの髪が流れているのを見ていて、漸く僕は、巫女さんの体の周りに薄い光が纏わっているのを知った。

カラカラ、と何かが転がる音に足元を見下ろせば、まず奇怪な紋様が目についた。

なんだ、これ。

さっきまで僕が立っていたところを中心に、円を描くように描かれている紋様。

注意してみれば、それも、巫女さんの体と同じように淡い光を放っていた。

足に何かが当たる。

拾い上げてみれば、先に赤く丸い石の付いた杖だった。

その石を指で触って、その冷たさに驚く。

それから、それを自分の頬に押し当てた。

「夢じゃ、ない……？」

声を発すると、ぴくりと巫女さんが反応した。

えらくゆつくりと顔を上げて、僕を見る。

その美しさに、はっと息を呑んだ。

細やかな肌の白さ。弱々しげな表情に、下がった、細い眉。

薄い唇が、歪む。

美しいと表現をしたが、どちらかというと、幼い印象を受けた。

やや赤みがかった双眸が、僕の顔をまっすぐに見てきていた。

声をかけようとして、躊躇う。

なんて声をかければいいか、思いつかなかったから。

巫女さんは、ふとして目をつぶり、顔を青ざめさせて、小刻みに震えた。

それから、祈るように天に顔を向けたあと、また僕を見てきた。

小さく息を吐く音が聞こえる。
それから、巫女さんは、苦々しげにお払い棒を握って、口を開いた。

「……私たちの世界を、救ってください」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。
魔法で体を石にでもされてしまったかのように動けなくなって、唾を飲み込むのも一苦労だった。

今、なんて？

世界を、救ってください……？

誰が？ まさか、僕が？

そんな、馬鹿な。

有り得ない。

そんなの、有り得ないはずだろ？

神様になんか会ってない。変な鏡に触れた記憶もない。

僕は、学校で授業を受けていたはずだ。

いきなりのことに混乱しつつも、はっと、思い出す。そうだ、ポケットに！

右ポケットの財布は放っておいて、左のポケットに突っ込んでおいた携帯電話を取り出し、開く。

圏外……いや、それは、なんとなく予想していた。

表示されている時刻を見る。今頃こみ上げてきた焦燥感のせいか、ディスプレイ上の数字をすぐに理解できない。

暫く見つめていて、やっとその数字を知ることができた。

十三時二十四分。つまり、午後一時二十四分。

壁紙の、アニメのキャラクターである少女の顔を見て、気分を落ち着けてから、ケータイを閉じる。

巫女さんに目をやると、何故かまた頭を下げていた。

あの、と、情報を得るべく声をかける。

巫女さんは、先程と同じくゆっくりと顔を上げた。
その顔には、少々の明るさが戻っていた。

「はい、なんでしょうか」

「ここは、どこですか？それと、世界を救って欲しい、という言葉の意味がよくわからないのですが」

綺麗な声だな、と思いつつ、聞きたいことを聞いた。

我ながら、すっかり舌が回ったことにびっくりだ。

「…ここは、ユラジア大陸のリデイン王国。その、王城です。……言葉の意味は、そのまま、です」

聞いたことのない地名。ユラジア…ってどこだよ。アジアじゃないのかよ。

王国？ 王政がある場所なのか？ その王城ってことは……もしかして、後ろで眠りこけているオッサンは、王様？

頭の中でぐるぐると疑問が渦巻く。

だが、こうして考えていられるのも不思議なくらい、心臓が早鐘を打っていた。

焦燥感が身を蝕む。

だけど。

だけど、それ以上に、高揚感が身を支配し始めていた。

もしかして、これって。

「突然喚び出してしまって、すみません。ですが、私たちにはもう時間が残されていないのです。……王が倒れ、国が火に包まれてい

る今、頼れるのは、あなたしか…」

その言葉を聞いて、その場で飛び跳ねそうになった。

まさか！

まさか、こんなことがあるうとは！！

僕が、喚び出された！？ それって、召喚されたってことだろ！？
誰に？ そんなの、決まってる。目の前に跪く巫女さんだ。

「僕に、世界を、救えと……？」

自分でも声が震えているのがわかる。
情けないが、でも、嬉しいのだ。
巫女さんは、はい、と力強く頷いた。

やはり！！

僕が、世界を救うために、召喚されたんだ。
なんとかっていう大陸に、この王国に！！

「お願いします。どうか、私たちを……！！」

胸の前で手を合わせる巫女さんに手を差し出す。
巫女さんは、少し躊躇ってから、僕の手をとった。
その手を引いて、立ち上がらせる。

「うん。僕で良かったら、力になるよ」

「……ありがとうございます」

安堵したように、巫女さんが微笑んだ。
僕よりも少し身長が小さくて、彼女が僅かに僕を見上げる形で。

そうして近くで巫女さんの顔を見ると、本当に可愛くて、羞恥心がこみ上げてきた。

こんな可愛い娘の近くにいたなんて……！

思わず彼女の手を放そうとしてしまうが、寸前で思いとどまる。

こんな機会、滅多にない。

手を繋いでいて、損はないはず！！

そうやって勇気を振り絞って一大決心したのだけれど、それは無駄になった。

真剣な表情になった巫女さんが、手を放して眠りこけているオッサンの元に行ってしまったからだ。

後追い、巫女さんの横に立つ。巫女さんは、胸元で手を合わせて祈るように目をつぶっていた。

「何をしてるの？」

そう聞いてみれば、王の御冥福をお祈りしているのです、と返ってきた。

へえ、この人、死んでるんだ。眠っているようにしか見えないんだけど……。

いまいち現実感がわかなくて首を捻っていると、行きましよう、と巫女さんが移動を始めたので、それについて行った。

その部屋を出て、長い廊下を歩く。

明かりが蝋燭の炎だけしかなく、とても薄暗かった。

床には紅い絨毯がひかれていて、石の壁には所々に亀裂が走っていた。

コツコツと足音を響かせながら歩く中、巫女さんと会話をする。

「ねえ、君の名前は？」

「あ、すみません。名乗り忘れていましたね。私はヒラルミ・小夜さよ

です」

「へえ…変わった名前だね。僕は、村瀬秀一。秀一って呼んでくれ」
「はい、わかりました」

そうして会話していると、また重い音が響いて、床が揺れた。
小夜さんがよろめいて、僕に向かって倒れ込んだ。
抱きとめようとしたけれど、踏ん張りきれずに倒れてしまう。

あ、柔らかい。

「す、すみません！ …… もう時間が残されていないようですね」

少しだけ顔を赤らめて、僕の上から退く小夜さん。
腰が細かった。いや、それ以上に、柔らかかった。

初めて知る女の子の感触にどきまぎしていると、小夜さんはすぐに真剣な表情に戻って僕に手を貸して立ち上がらせてくれた。

それから、袖に手を突っ込んで一枚の札を引き抜きながら、何やら考えるかのように声を漏らす。

少しして、何かに気がついたように僕の顔を見た。

「シューイチさん、先程の…… 光る箱は」

その言葉に、このこと？ と携帯電話を取り出してみせると、
それは何なのですか？ と尋ねられた。

「これは、僕の世界の科学技術の結晶だよ。携帯電話って言うんだ」
「何に使えるのですか？」

続けざまに浴びせられた質問に、そしてその剣幕に押されて、うん、まあ、色々、と濁して言ってしまった。

「つまり、万能…ということですか？」

「いや、万能って程じゃないよ。遠くの人と話ができたり、写真を撮ったり」

小夜さんは、シャシン…ですか？ と首を傾げてから、僕の手を取った。

「剣の一本でも用意して差し上げたかったのですが、本当に時間がありません。なので、転移します」

「え？ 転移……って」

眩く間に、小夜さんが何やら呪文のようなものを口にして、そうしたら、足元に紋様が広がって、そこから眩い光が放たれた。

驚いて目をつぶる。

おかしな浮遊感に襲われた後、足に確かな地面の硬さを感じて、目を開けた。

目前に広がるのは、沢山の人間。大部分が、鎧を着て、剣と盾を持っていた。

他にも、如何にも悪魔みたいな見た目の奴とか、普通の人に見える者まで、それら全てがこちらに向かってきていた。

地響きが凄い。

向こうの方で、ローブが何かに身を包んだ人が腕を振り上げた。

「っ！」

小夜さんが小さく声を上げて、ぱっ！ と前に腕を突き出した。と、遠くから火の玉のようなものが飛んできて、僕たちの方に…

…。

うわ、危ない！！

そう思ったときには、その火の玉は小夜さんが張っていたバリアのようなものに阻まれて消えていた。

即座にバリアーを消して懷に手を差し入れ、何枚もの札を取り出す小夜さん。

片腕を左右上下に動かして、印のようなものを結ぶと、御札が光に包まれて消えた。

「許してください……」

とん、と地を蹴って、小夜さんが跳んだ。いや、『飛んだ』。

……ファンタジーだ。

小夜さんが空中で腕を振ると、一瞬振った腕が光って、次には、爆発が起こっていた。

左から、右に。

流れるように爆発していき、人が、その破片が舞う。

暴風に腕で顔を庇っていると、小夜さんが隣に降りてきた。

額に玉のような汗を浮かべて、肩で息をしている。

その表情が、一層険しくなった。

「小夜さん……？」

「……来ます、用心して……！」

はあ、と間の抜けた返事をした、その時だった。

前方に、男が現れたのは。

あれ、いつのまに。

マントを肩から下げた、青年。

そいつは、僕から見ても格好よかった。

横で小夜さんが御札を取り出すのを見ていると、青年が突如笑い

出す。

「そいつが救世主か！ 弱そうじゃないか!!」

どの言葉に力チンときて、言い返そうと口を開き、すぐに閉じる。それから、隣の小夜さんに、あいつ、何て名前かわかる？ と聞いた。

「わかりません。あいつは、突如大陸を襲い出した男。自らを、魔王と名乗る男です。あいつに、この国は滅ぼされました。

他の国も、恐らく。…あいつは、この世界を終わらせようとしているんです。

止めさせるべく、エルフや、力のない妖精までもが人間に協力してくれましたが……全て、あいつの前に倒れました。

この国が……私が、最後の希望だと、私の代わりに命を落としたお母さんは……先代の巫女は、そう言いました。

もう、あなたにかけのしかありません。どうか、あいつを倒してください!!」

「え？ あいつを倒すの？」

まあ、世界を救うって言うんだから、悪を倒すのも当たり前か。で、魔王、ね。

あの、僕とそう変わらないような男が。

……倒すっていったって、どうやって？

なんか、変な力に目覚めているわけでもないし……どうすればいいんだろう。

そうだ、小夜さんが何かくれるのかも。

そう聞いてみれば、小夜さんは、

「ケータイというものは!? 武器ではないのですか? シヤシンとい

うものは!？」

と、よくわからないことを叫ばれた。

「いや、ケータイは武器じゃないけど……」

「そう、ですか、勘違いしてました……だとしたら、武器に頼らない肉弾戦の方が得意なのですね？」

「肉弾戦……って言われても」

そんなの、できないんだけど。

向こうでニヤニヤしている青年に目を向けていると、小夜さんは、まさか……と呟いた。

「そんな……やはり、失敗だった……？」

失敗？ 何が？

それを聞こうと横を向くと、そこに小夜さんの姿はなかった。

疑問に思う間もなく暴風に襲われてよろけ、次いで遙か後方で起こった爆発の音に耳をやられた。

何とか踏ん張って後ろを見れば、遠く、黒い煙が上がっていた。

その中から、ボツ！と何かが飛び出してくる。

小夜さんだ！

煙の尾を引いて、激しく揺らめく光を纏って飛ぶ小夜さんはすぐに俺の横を通り抜け、あの魔王とかいう青年の元に飛んで行く。

また凄い風に襲われてよろめいていると、轟音。

見れば、あの青年の足元に小夜さんが倒れていた。

浮いていた両足が、遅れてばかりと落ちる。

「な……」

啞然として、声がでなかった。

え、ちょ、小夜さんやられちゃった!?

ぼ、僕が、戦わなきゃいけないのか……?

いや、無理無理無理、無理だつて!

だつて、僕、何の力も持っていないし……多分。

……いや、もしかしたら。

「お前はかかってこないのか？」

青年が、声をかけてくる。

うーん、魔王って言う割には、殺気だとかプレッシャーとか、そういうのを感じないし……案外、いけるかも?

「……よし!」

気合の声を出して、一步、踏み出す。

と、青年が腕を振った。

途端に視界が傾き、地面に激突する。

足を、切断されていた。

左足、膝の下。

そこが、どくんどくと脈打つて、血液を噴出させていた。

血液を失うことへの焦燥感と、体温を失うことへの恐怖はあったが、どうしてか痛みはない。

いや、痛いような、痛くないような。

しかし、血液が流れていくのを抑えるために慌てて切断面を抑えると、激痛が襲ってきた。

喉の奥からせりあがってきた悲鳴を噛み殺そうとして、間違えて唇を噛んでしまった。

痛みの連鎖に悶えていると、「見ろ、何が救世主だ。奴はとんでもなく無力だぞ」という声が聞こえてきた。

そんなの当たり前、当たり前！

必死に立ち上がろうとすると、再び青年が腕を振るった。

今度は、胸に衝撃が来る。

ああ、駄目だ。

これは駄目だ。

これは、死んだな。

離れていく体の断面から零れる臓器を眺めながら、そんなことを思っ……意識を、失った。

（後書き）

「まだ……まだ終わってない!!」

軋む体を無理矢理動かして、立ち上がる小夜。
自ら大魔王と名乗る男は、嘲笑する。
無駄なことを、と。

「お、終わらせない……終わらせちゃいけない……」

搾り出すような声で言う小夜を、男は無造作に振った腕で殴り飛ばした。

地面を削り、弾かれて転がって、ようやく止まる。

もう、動けるような体じゃないのに、それでも立ち上がる小夜。震える足で立って、それから、男を睨みつける。

異世界から喚んだ頼みの綱も、役に立たなかった。

こちらの都合で喚んで死なせてしまったのは悪いが、それでも、と。

もう頼るものもない。守ってくれるものもない。

私がやらねば。

私しかないから。

「私が、やらないと……」

この世界を守れと、彼女の母は言った。

そのために生かすのだと。

それがわかっていいるから、彼女は立ち上がる。

「しぶとい奴だ」

だけど。

だけど、この男の腕の、たったひと振りで。

何かに押し潰されるように、小夜は地面に叩きつけられた。そして、地面ごと陥没する。

ギリと。
バキリと。
グシャリと。

人間として、出してはいけない音を出して。

それでも、立ち上がろうとする。

血が広がっていく。

彼女の手がぴくぴくと動くのに合わせて、波紋が広がるほどに。

男は再度嘲笑した。

巫女も、無力なものだ、と。

それから、腕を振るった。

「おかあ…さ…」

それが、彼女の最後の言葉。

その世界で発せられた、最後の言葉。

その日、名も知らない、どこかの世界が消滅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7687v/>

お前に世界が救えるか？

2011年10月8日07時21分発行